

なるほど!

ICT

第16回

クラウドも “ハイブリッド”が 時代の主流に

めまぐるしく変化するICTを理解していただくためのポイントを紹介する「なるほど! ICT」。今回は、クラウドの新しいスタイルとして登場してきたハイブリッドクラウドとその導入に向けたポイントを紹介します。

変化の激しい時代にも柔軟に即応できるクラウドコンピューティング

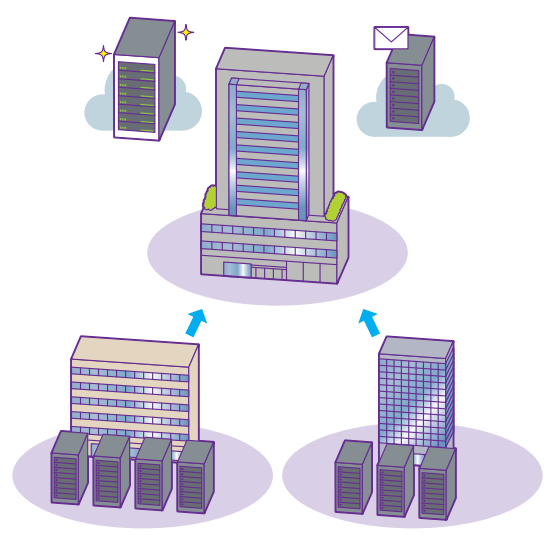
システムの移行・設置の際にクラウドサービスを優先して検討する「クラウドファースト」という言葉が定着してきたように、クラウドコンピューティングはシステムを構築する時の第一選択肢になってきました。その最大の理由は、俊敏性を持ち、新たな要件にも柔軟に対応する——つまり、激しい変化にも即応できるからです。

そして今、クラウドコンピューティングへの関心は、「ビジネスにどう活かすか」に移り、「パブリッククラウド（以下、パブリック）」と「プライベートクラウド（以下、プライベート）」の2方向で導入が進んでいます。パブリックは、クラウド事業者の基

盤を不特定多数のユーザーで共用する環境をつくるというもの。導入コストを抑えられることから、ICT投資に余裕のない企業やキャンペーンサイトのような一時的に大量の処理が必要な時に利用されています。一方のプライベートは、クラウド基盤を自社のみで使用するというもので、セキュリティも運用もコントロールでき、厳重な管理が必要な機密データや個人データなどを多く抱える製造業や金融業を中心に導入が進んでいます。

2年後には大企業の半数がハイブリッドクラウドに

最近、クラウドコンピューティングを次のステップへ進める新たな動きとして登場してきたのが、「ハイブリッドクラウド（以下、ハイブリッド）」です。



M&Aを実施した流通企業では
両社の基幹システムを統合してプライベート上で展開し、サーバ台数を削減。メールシステムは従量課金のパブリックに移行。これにより、システムの構築・運用コストを削減。さらに、社内端末はシンクライアントに置き換え、社員の管理負荷を軽減するとともにセキュリティも強化。



社内向けシステムの質向上をめざしたメーカーでは
パブリックの利用で利便性の高いメールサービスを低コストで実現。業務システムはプライベートへ移行し、セキュリティ、可用性、耐障害性を確保。オンプレミスで社員情報を管理し、社内システムの利用をシングルサインオンで実現。運用コストを削減し、システム提供環境の質を向上。

これは、「パブリック」、「プライベート」それぞれの特性を活かし、適材適所で使い分けたり連携させる、クラウドコンピューティングの実現形態の1つです。

調査会社のガートナーは、2017年末までに大企業の約半数がハイブリッドを採用すると予測しています。その理由として、3つの長所をうまく組み合わせることで、「システム構築のスピードが速い」「需要の変化にも柔軟に対応できる」「災害対策を図ることも比較的簡単」「機密情報や個人情報厳重に保護できる」など、システムの目的や扱うデータの性質などにあつた最適な環境が、運用負荷とコストを抑えながら効率良く実現できることがあげられています。

あるアパレルメーカーでは、ECビジネスへ早期に進出するため、ハイブリッドを採用しました。コンテンツデータはパブリック、注文システムはプライベートに置いて新規ビジネスのインフラを短期間で構築。また、顧客情報と決済データはオンプレミスの既存システムを活用してセキュリティを確保し、素早い事業の立ち上げと、売上拡大に成功しています。

快適なICT環境の実現を担うクラウドフェデレーション

ハイブリッドの注目度は高まり、導入を検討する企業は増えています。ただ、導入を成功させるためには、いくつかのハードルがあります。例えば、複数のクラ

ウドと非クラウド型のオンプレミスシステムを連携させて一つのシステムとして認識できるようにする場合、管理画面も統合して操作しやすい環境を実現するために高度な技術が必要です。また、構築後も変化の激しいICTの動向を捉え続け、新しい技術をシステムに反映することも重要です。

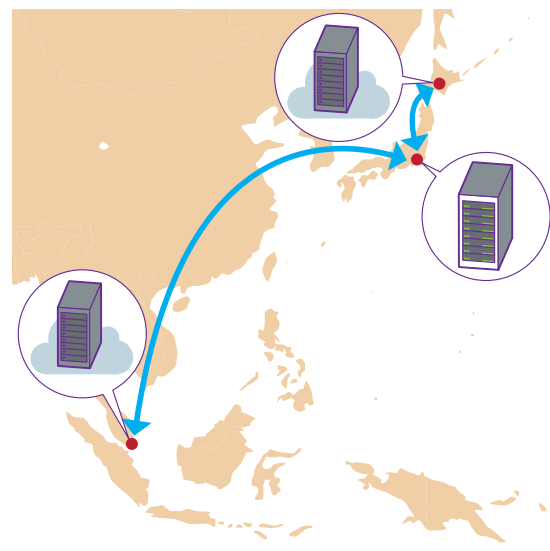
こうしたハードルを乗り越えられるクラウド連携サービスとして登場してきたのが「クラウドフェデレーション」です。ユーザーが要望を伝えると、クラウドフェデレーション事業者はその内容に合致する最適な形——システムの集約やデータ連携などから運用・保守までのトータルソリューションをワンストップで提供し、最適なICT環境を構築します。

このようなサービスが提供できるのは、「オンプレミスでのシステム設計から保守までの豊富な実績がある」「複数のクラウドに精通し、それぞれの特性に合わせた開発・運用ができる」「オンプレミスからクラウドへの移行実績がある」「マルチベンダである」「クラウド上でも運用・保守ができる」など、クラウドと非クラウドのいずれにも豊富な実績をもつ事業者だけです。ビジネスを成功に導くICT環境を実現するためには、優れたクラウドフェデレーション事業者をICTパートナーにすることが、重要なポイントになってきました。



人気動向が激しいネット系ゲーム会社では

需要が安定したコンテンツはプライベートに置き、安定運用を実施。一方、人気予測が難しい新規コンテンツはパブリックでスモールスタートし、人気に応じて柔軟にシステムを増減。投資額と運用の負荷を抑えながら、動きの速いアミューズメント業界の動向にマッチする環境を実現。



災害対策が急務だった金融機関では

オンプレミスのバックアップサイトとして、異なる2都市にあるデータセンターのプライベートを利用。さらに、別事業者のパブリックに通常はデータのみバックアップし、災害発生時には仮想サーバが利用できる体制を用意。コストを削減しながら、二重三重のBCP/DR対策を実施。